

ほとくのシングルライフ

結婚するには忙しすぎる

沢山したいことがあつて

吉田 清彦

「ひとり歩きの会」

吉岡 吉田さんがシングルライフについて考えるようになったのは

吉田 4年ぐらい前かなあ、意識的に考えるようになったね。それまでは理論的に考えなかった。二回目の離婚をした後に「ひとり歩きの会」というのを作るから一緒にやらないか、という話があつたね。おもしろそうだといいことであつたわけです。

吉岡 メンバーはシングルの方ばかりですか。

吉田 そうね。元々戦争未亡人というか

な、独婦連の人たちの会があつたんだけど、もっと若い人達も一緒に、ということになってメンバーに加わつたのです。

確信犯的シングル

吉岡 あのう、シングルでいくつていうのは、もう確信ですか。

吉田 まあ、確信犯というのかね。確信犯的シングルという言葉を、僕は使っているけどね。

吉岡 今の自分にびったりだと。

吉田 絶対これしかない、ということでは確かにないと思うけど。それに相手のあることやから、多少揺れるかも知れな

い。

僕は、二回目の結婚を自分の意志でやめた。ちょうど一年ぐらいの時、離婚した方がお互いのためと話し合つて別れたんだけどその時に、自分は結婚というシステムに向いていないと思つた。一つの確信みたいなものやね。

百人いれば百人のスタイル

吉岡 今の夫婦のあり方に関して。

吉田 世間的な言葉で言うとならぬ、その主人、誰その奥さんという、それが、僕いやなのね。そういう余分なものを着るのが、吉田清彦という一個の人間で生きてきたのにな。役割をしょい込みたくない、そういう点では僕は非常にわがままだと思ふ。ただそれを通すためには、相手のわがままもわからないとだめなわけ。

吉岡 いろいろなカップルがあつてよいということですか。

吉田 そうそう、百人いれば百人のスタイルやね。

子供ができた時に問題が

吉岡 じゃあ、現在の結婚の形について。
吉田 もちろん、なくなったらよいと思
ってるよね。非常に余分なものをしよ
い込んでしまうから。



ただ、今の結婚制度とは違ったいろ
んなモデルを提案していく時期が、来
ると思うね。アメリカ型拡大家族的や
り方もあるし、表面上は非常にゆるやかな

ヨーロッパ的な、日本で言うところの同
棲かな、いろいろあると思う。日本の文
化の中から出てくる違ったやり方、例え
ば別居結婚も考えられるよね。

籍を入れる、入れないはかなり大きな
問題だと思うよ。今の日本の戸籍制度で
は、男女が対等平等に籍をつくるってこ
とは出来ない、結局、どっちかの籍に入
る。自分の名字を失うわけでしょ。この
制度が、家庭生活の中における男女の平
等を保証しないわけよ。

結婚でも同居でも籍を入れない、とい
うやり方もあるわね。問題は子供ができ
た時。今の世の中では、戸籍上の記載が
子にとって不都合であるなら、子供が生
まれて始めて婚姻届を出し、その場で出
生届を出す。で、その場で離婚届を出す、
非常にややこしいけれどね。子の戸籍上
の両親は揃い、又、親は本来の名字を取
り戻せる、ということですね。

まあそこまでしなくても別にかまへん、
世間が私生児と言おうが、何と言おうが

ね、でもそのあたり非常にむずかしい。

弱くなった世間の規範

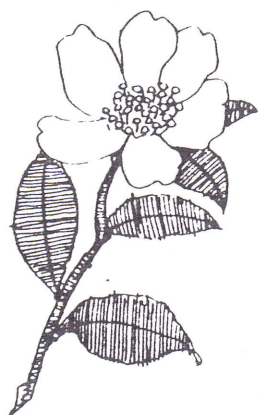
吉岡 シングルライフを続けられる吉田
さんを見る世間の目、というのは。

吉田 ごく一般的な生き方をしている人
の身の回りに、結婚しない人だとか、離
婚してのびのびしている人なんかが増え
てきているでしょ。

二十年前にはほとんどなかったことだ
けど、それにそういう人たちは、あんま
り大っぴらには生きてなかった……

ところが全共闘運動の頃から、世の中
はどんどん変わってきたよね。皆同じ、
というのはおかしいやないか。皆とい
うものに対して背を向けて一人、本当の意

サザンカ



味での個というものを主張したはじめてのものが、僕は全共闘だと思う。ほぼ同時期にウーマン・リブがかなり過激に展開したけれども、あれも同じ。根は別のところにあったけどね。

その頃から少しずつ僕自身というものが生きやすくなって、世間の規範力も目にみえてゆるくなってきた。

もう一つは、やっぱり年代やね。四十年代になってしまうと、世間の方があきらめるということはあるね。

増える三十代五十代離婚

吉岡 結婚するのは当たり前、というのはもうなくなってきているんじゃないですか。

吉田 地方と都会で全然違うよね。地方じゃ、結婚が一つの生活の単位だもの。生産の単位でもあるしね。村の構成員としては結婚してないと何も始まらないわけ。男の場合、世帯主、というか家の跡つぎね、そういう点では、やはり結婚し

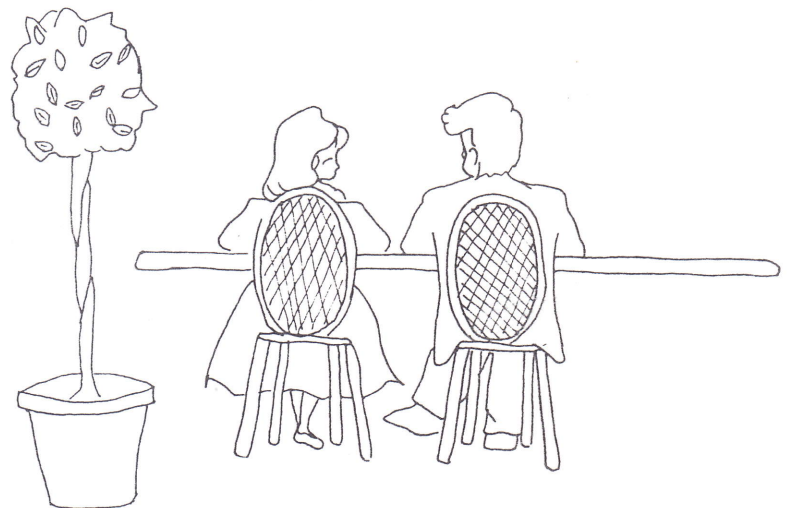
て始めて一人前、ということと言われるよね。

吉岡 ずいぶん離婚が増えてますね。

吉田 今、三十代と五十代の離婚が一番大きいわけでしょ、五十代というのは夫が停年退職の頃でしょ、子供はもう成人して結婚するわけだね。妻は女のつとめみたいなのを教えられて、ずっと辛棒してきたわけね。五十で別れたって、まだ三十年もある。

三十代の離婚は、子供が学齢期に達するぐらい。結婚十年前後の夫婦で、子育てなんかをめぐって対立するわけね。子供が小さくて、父親の影響を与えないうちに、別れたい人が多いようですが。

ただ僕はね。離婚というのは親同志のいきちがいなんだから、子供を巻き込むのは反対だね。子供の方に、こんなお父ちゃんやお母ちゃんいらん、と意志表示するチャンスを与えてやらないとね。最終的に十五とか十八とかでケリをつける。それまでは離婚しても、子供側からの面



接権を絶対に保証しない限り、離婚しちゃいけないぐらいの法律をつくらないといかん、と思うね。子供が犠牲になるから離婚はやめなさいとは言わない。男と女の出来事だからね。ただ別れるにしても親であることの責任はまぬがれないから、子供側から親に常にコンタクトできる仕組みを作っ始めて、僕は離婚は成立するものと思う。

家庭は子育ての縮図

吉岡 シングルということにこだわっていらっしやるわけですね。

吉田 そうだよ。たださっきも言ったように、子供がある時期になるまでは、共同生活が必要かもしれない。だから僕は、家庭というのは子育ての縮図だと思う。男女の愛情を成就させたり、育てたりする仕組みとしては家庭は非常に不適切だけど。

吉岡 別居結婚が望ましい、ということですか。

吉田 ま、通い婚というか。

僕はねえ、結婚というのはよっぽひまな人がすると思うのね(笑)僕なんか、したいこと沢山あるわけで、時間的にもパートナーに合わせられるはずがない。週末の通い婚というのは、週に一回は二人の時間をもつという一つの約束事になってるわけね。僕なんか、それもしんどいというか(笑)せいせい月に一〜二回

会えればいいわけで……バイオリズムが合わなければ、合わなくても別に……。

一番大事な経済問題

吉岡 経済的・精神的にお互いが自立してなくてはダメですよねえ。

吉田 経済は、たとえ結婚したとしても全く別々にするべきやね。お互いの稼ぎに応じた支払いにするとか、それとは関係なく、一定額を共同生活にまわすとかにして……。経済的自立が一番大事なところと思うね。簡単に言うくと、自分の寄って立つところを自分の中にもっているということだよな。

吉岡 そこにこだわってないと、段々自分になくなっていく、ということですか。

吉田 向うの土俵、つまり世間やね、そこに引きずられていく、ということやね。僕たちはやはり、既存の規範力のようなものに、常に抵抗感を表に出していくことが大事なことだと思う。

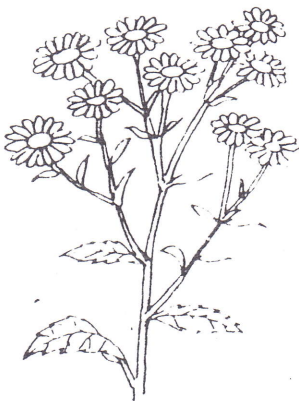
吉岡 一夫一婦制以外のいろんな形のカ

ップルが、認められる社会がくればいいですよな。

吉田 先にも言ったけど十人十色ということやね。物の考え方だけでなく暮らし方、結婚、家庭のつくり方で十人いれば十の形があるということね。どんどん皆が言い合うようになれば、今、多数派の中にいる人達でも、ずい分楽になると思うよ。

一方の極に結婚があり、対極に非婚があるとしても、非婚に限りなく近い結婚とか、ほとんど結婚に近い非婚もあるわけでしょ。そういう風に考えていけばいいわけ。だから結婚かシングルか、とい

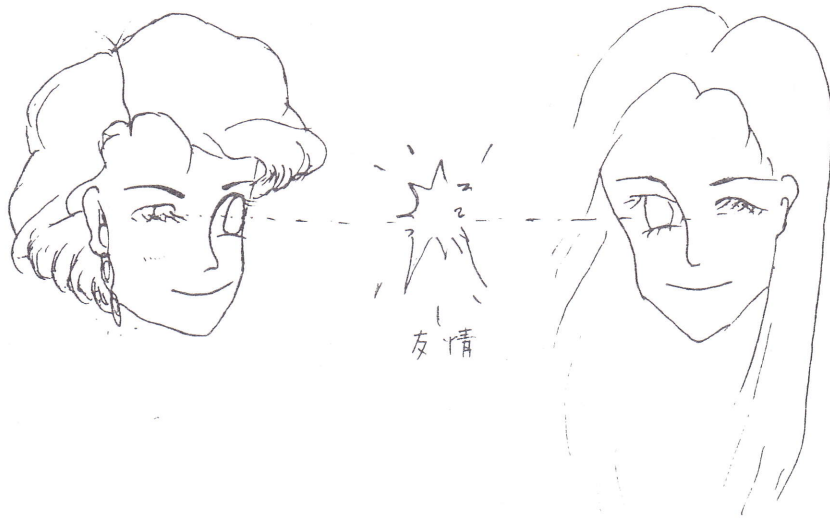
ノギフ



う命題をたてたととしても、百%結婚、百%シングルの対立の図式とはならないよ。まん中に多種多様なスタイルがあるんだから。

吉岡 本日はありがとうございます。
社会の中の多数派の既婚者も、少数派のシングルも、吉田さんのように自分のスタイルで、自分の思うままに生きられる世の中になることを願ってこのインタビューをしめくりたいと思います。

プロフィール 吉田清彦
よしだきよひこ
1944年、兵庫県生まれ。神戸外大
退。フリーライター 「コマージュ」の
中の男女差別を問い直す会 「新しい家
庭科We」 「それいゆ」等で活動 神
戸市在住。



インタビュー後記

吉岡慶子

ソフトムードの語り口でやさしいおと
うさん、といった感じの吉田清彦さん、
話の中身はデータをまじえつつ、男と女
の関係や戸籍のことなど話題は多岐にわ
たり、かなりの硬派。インタビューは、
特製の柿茶をいただきながらいつまでも
話が尽きず、すっかり予定時間をオーバ
ーしてしまいました。そして私のほうは
すっかり、面白い講議を受けている学生
の気分でした。
シングル・ライフに関する本の出版は
まだ予定の段階であるとか。早くお目
にかけたいですね。